
彼女の為に出来ること

霧崎俊哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の為に出来ること

【コード】

N0695W

【作者名】

霧崎俊哉

【あらすじ】

この小説の執筆者、兼主人公の尚人は同じクラスで彼女の笹原愛理と病室で話していた。

愛理は昔から体が弱く病院通いだったが高校二年生の春愛理は、尚人の家で倒れて病院に運ばれた。精密検査の結果愛理が倒れた原因は六センチを越える脳内腫瘍だった。

第一 プロローグ + 告白直前

「遂に手術は明日かあ」

「うん。何か心配なんだあ」

「大丈夫。俺が付いてるから」

「うん。ありがとう 尚人。」

ああ。心配はいらない、君の為に何だってするよ」

なぜいきなりこのような話からかと言うとこの話は、俺と彼女との出会いから彼女の病気の手術後までをつづった話だからだ。

「あつ、申し遅れましたこの話を書かしてもらいそして主人公の俺こと高山尚人と申します。

皆様を感動させるような話を書きたいと思います。では俺の書く

彼女の為に出来ること、ご覧ください。」

中学校三年の春俺はある人に恋をしていた。

その子の名は笹原愛理。中学校二年生で同じクラスになった人だ。

俺はその子に一目惚れだった。まあ世の中の男なら絶対にそうなるなぜか、なぜなら彼女は成績優秀で容姿端麗なのだ。

だかなぜだか彼女は孤立しがちなのだその理由は 体が悪いとゆう理由なのだ。ただそれだけで彼女はクラスから孤立していたのだ。

なぜそれだけで? と思う人はいるかも知れない。確かに端からみたらなぜ? ってなるだろう。

だが彼女を自分のクラスの人だと考えてみてくれ。

遊びに誘っても

「ごめんなさい 無理です」今日誰々の誕生日パーティーをするから来ない？と聞いても

「ごめんなさい 今日是用事があった」等
毎回のように言われてみてくれ。

いやにならないか？

どうせ誘っても来ないじゃん、はぶかれてしまう。

クラスの皆は彼女の病院通いを知っている。

だがそれを知っていてもクラスの皆は彼女をはぶいてしまう。

それでも

俺は彼女の事を気にしていた。

そして

三年の春、夏休みに入る前に俺はある決断を下した。それは彼女に告白することだった。

そして

告白当日。

俺は彼女を体育館裏に呼び出した。

「ちょっと良いか？笹原。」

「はい、なんででしょうか。」

「あのさ、笹原によろがあるから放課後体育館裏に来てくれないかな？」

俺は昼休みなのもあってクラスの皆に聞かれないように言った。

「はい、別に構いませんよ。」

と彼女は不思議そうな顔で答えた。

「ありがとう。じゃ また放課後」と僕はいつてその場を後にした。
そして昼休みが終わり。

五時間目が終わり。

六時間目が終わった。

ついに約束の放課後になった。

僕は彼女の体が心配なので先に行って待つてようと急ぎ足で待ち合わせの体育館裏に向かった。

「よし、この分なら彼女を待たせなくてすむぞ」と僕は呟き足を少し早めた。

そして待ち合わせの場所体育館裏に着く手前の角で俺は啞然とした。なぜならもうそこには彼女がもじもじしながら待っていたのだ。

「なぜだ

HRが終わり間もなくして飛び出たっのに」「はっ

そうか来る途中で先生に呼び止められている間に。

と俺が一人考えている間に

「あの、高山君ですよね？こんな所で何をしているんですか？」と不意に声をかけられた。

その相手はまさに告白の相手の笹原愛理だった。

告白

「ああ、ごめん。ちょっと考え事してて俺はその場しのぎで口にした。」

「そうですか。高山君は忙しい方ですね」

「なんで？」

「だって、待ち合わせの場所に来てまで他の事を考えてるんなんで忙しい方しか出来ませんよ」

彼女はいつも通りの口調で言ったが俺には微かに笑ったように見えた。

そして俺は決意した。

そう彼女、笹原愛理に告白することを。

するとタイミング良く彼女も聞いてきた。

「それより高山君。お話は何ですか？」

「あつ、うん。ええーと」

やばい緊張してきた。

彼女の顔が見れない。

「どうしたんですか？顔が赤いですよ？それに汗も・・・」

「えつ、あつ　大丈夫だよ」どうしたってんだよ言いたいことが言えない。

俺よ男らしく行け！

「あのさ、笹原」

「はい、なんででしょうか」俺はその言葉に全神経を集中して言った。

「笹原、おつ、俺と　付き合ってくれないか！」

告白の答え

「おっ、俺と付き合ってくれないか！」

俺はこの告白の答えに俺の人生がかかっている。そういうような感じで彼女に告げた。

彼女は口を少し開けながら固まっていた。

「あっ、あの笹原？」

「はっ、すみません。凄くびっくりしたもので」

俺の問いかけで我にかえった彼女はそう言った。
そうして

「あっ、あの少しだけ時間をもらっても宜しいですか？」

彼女はまだ驚きを隠せないのか少し顔をひきつりながら言った。

「えっ あっ、うん。大丈夫だよ 待ってるから いつでも 声をかけて。」

俺はその場で答えをもらうつもりだったから少し詰まったが彼女が真剣に考えてくれるのを期待して承諾した。

「はい、ありがとございます。では後日改めて答えを出させていただきます。では これで失礼します」

彼女はそう言うのと早足でその場を去った。僕は彼女の帰る後ろ姿を見て告白が成功するように心のなかで祈っていた。彼女の背中が見えなくなり俺はゆっくりとその場を後にした。

告白から3日たった日

俺は今日も答えが無いと思い放課後になると同じクラスで腐れ縁の葵健太郎あおいけんたろうと廊かを歩いていた。

「なあ。尚人 まだ答えもらってないのか？」

健太郎はおもむろに口にしてきた。

「んっ？ あっ ああ。残念ながらまだなんだ」

「そうか、まあ 彼女の様子をみてたら ぱつとしないから まだ
悩んでくれてるだろうね」

彼は確信があるのか何か自信ありげに口にしていた。

とまあ

こんな感じに楽しく話していると不意に後ろから今にも消え入りそ
うなが聞こえた。

「あっあのう、高山君。お話している所申しわけありませんが少し
良いですか？」

後ろには顔を赤らめた笹原愛理が立っていた。

「えっ、うん 大丈夫だよ」すると健太郎が

「尚人、俺ようがあるから先帰るわあ。 じゃあな」 健太郎は急
に用があると帰ってしまった。

「あっ、ちよっ おい健太郎！」

俺が名前を呼んでいる間に健太郎の背中はずいぶん小さくなって
いった。

「あのう、高山君。ここじゃあ恥ずかしいのでちよつと来てくださ
い」

「うっ うん」

俺は彼女に連れられてある場所に連れてこられた。

その場所は何と俺が彼女に告白をした体育館裏だった。

「すいません 急にこんな場所に連れてきてしまって
彼女は申し訳なさそうに言った。

「大丈夫だよ、君の頼みなら例え日のなか、水のなかだよ」

俺は冗談間ぢりであった。 その瞬間に俺の思い違いかも知れない
が彼女が笑ってくれたように思えた。

だがその後どちらとも話す事無く静寂だけがそこを支配した。すると彼女が、痺れを切らしたか、はたまた意を決したか彼女がついに告白の答えを口にした。

「それで高山君からの告白の答えですが」

「うっ うん」

俺は唾を飲み心の準備をした。

よしどんなフラレかたをしたって最後まで平常心でいくぞ！

「その、高山君からの告白を慎んでお受けします」

「へっ？」

俺はひとときは高いこえで声を出してしまった。

「あのう、どうかしましたか？」

「いつ、いやぁ 予想と違う答えが帰ってきたからつい」

これはおれの本心からでた言葉だった。

実際にフラれるのを想定で自分の気持ちを伝えたから本当のところ自信は無かった。

だが彼女は本気で悩み本気で考え抜いた答えなのだろう彼女は言い切った感をした彼女の顔がそこにあった。

そして俺は新たな気持ちで胸の中で沸き上がった。

絶対に彼女を悲しませない。

絶対に彼女を守りきる

という事を心に決めていた。

「あの、笹原。ありがとう」

「いえ、高山君が初めてだったんです。私に告白をしてくれたのわ」

「えっ？そっなの？」

「はい。ほら 私ってクラスで浮いていたので告白とかされたことが無かったんですよ」

「そう なんだ」

確かに浮いているのはわからなくもない。

多分

他にも彼女に気がある奴はいただろう。

だが

回りのふいんきのせいで気持ちを伝えられなかったのだろう。

その辺は今時の男子の根性の無さに呆れてさえくるが

そんなことはどうでもいい。

彼女は告白を受け入れてくれた そしたらここに長居は無用。よし

！いっぞ。

「あの、一緒に帰らないか？」俺は彼女の様子を伺いつつ告げた。

「はっ。はいでは、一緒に帰りましょう」

彼女はぎこちなかったがそこは気にしない方向で。

「じゃあ 行こうか」

俺は出来るだけ平常心で伝えた。

「はっ はい！」

彼女はなぜだか気合いが入っていた。

「あの、高山君？」

「尚人で良いよ、せっかく付き合い始めたんだし

僕はあつ 愛理って呼ぶから」

「わっ、わかりました。では、なっ なな 尚人

手を繋ぎま

せんか？」

「へっ？」

またおれは甲高い声を上げてしまった。

「うん、いいよ」

そう言って俺は手を差し出した。

彼女は一瞬ビクっとしたが俺の手をゆっくりそして確実に握った。

「ああ 愛理の手暖かくて柔らかい、これが愛理の手」

俺は一人で興奮していた。

そして

「じゃあ 行きましょう」

彼女は自分から俺の手を引っ張った。

「うっ、うん！」

こうして俺らは付き合い始めた。俺達が歩きだした時に俺はふと空を見ると空には綺麗な夕焼けがそこにあった、

第二、彼らの日々（学校にて）

告白が無事に承諾され一週間が過ぎそろそろ夏休み前の期末テストの日が刻一刻と迫っていたなか俺は未だに付き合っているとゆう安心感から浮かれきっていた。「おい 尚人。 聞こえてるかあ。」

「尚人」

「尚人」

「尚人」

「おい 尚人！ いい加減我にかえれ！」

と耳もと大声で呼ばれた。

「うわあ〜！ なんだ健太郎か。 びつくりしたあ」「俺が何回も

呼んでもきかねんだもんよ」

「そうか、悪かったな」

俺は少々不機嫌な健太郎をなだめるように言った。

「ったく。 浮かれんのも良いが 期末テスト近いんだからちったあ

気持ち引き締めろよ！」

「えっ。 もうそんな時期だっけ？」

「！！！！、おまえが浮かれてっから日にちの感覚が狂ってたんだよ。

多分」

健太郎は呆れた顔をして俺にそう告げた。

「うっ 嘘だろう！」

「本当だ」

「嘘だ、そんなに早く時間が過ぎる筈が無いじゃないか」

俺は健太郎がはめにきてるような気がして反論したが。

現実はそのなにごくは無かった。

「まあ 俺の忠告を聞かないのは良いが現に期末テストまで後5日しかねえぞ」

「そっ そんな訳・・・」

俺は恐る恐る教室に飾つてあるカレンダーを見た瞬間現実に光の速度で現実に引き戻された。

「うわぁ〜!」

「うるせ〜。少しポリウム下げる バカ」

時間はもう放課後だが叫ぶような大声をあげたら周りが一斉に振り向き注目的になつちまうと言つてからそうなるを理解したが、考えている間にも俺らは注目的になつていた。

「ほらぁ、お前が大声出すから皆こつち向いたろつが!」

「ごっ ごめん」

「つたく いいから行くぞ」「うっ うん」

健太郎は俺の腕を引つ張つて生徒達の間を通りながら進んだ。

そして 玄関までやつとの思いで着いた。

「ああ いつもの廊下がめっちゃ長く感じたな」

「うん そうだね」

すると健太郎が急に

「あつ 俺用事があつたんだ、それじゃあ明日な」

「おっ おい」

声をかけたが健太郎の耳に届かなかつたのか健太郎はそのまま帰つてしまった。「っ! たくなんなんだよ

いきなり手を引つ張つて走り出したと思つたら 急に用事を思い出したつていつて帰るし」

俺が玄関前でぶつぶつ呟いていると、不意に後ろから

「なっ 尚人 一緒に帰りませんか?」

「うわぁ!」

俺は思わず大声を出してしまった。

だが振り替えるとそこには、彼女の愛理が真つ青な顔で立っていた。「なっ なんだ愛理かびっくりした・・・」

んっ？おかしいぞ返事がない。
やばいもしかして直立不動のまま死んでんのか？ふと俺が考えていた瞬間 「勝手に私を殺さないでください」
突然彼女は喋りだした。「あの、一緒に帰りませんか？」
彼女は俺にそう告げた。「えっ？あっ うん 良いよ」
彼女が急に一緒に帰ろうと言うからびっくりしたけどそこは冷静に対象できた。

彼らの日々（帰り道にて）

俺は愛理と帰り道を歩いていた。
少々回りの目線が痛々しいがそこは気にしない方向で。

ああ

何を話せば良いんだろう!?

こつゆつとこは初めてだと分かんないんだよ

もてない自分を呪いたい!!

など、と自分にツツコミをいれてると。

「こつゆつの慣れてないんでなんかきまづいね」

意外にも彼女の方から話しかけてきた

「うっ　うん。そうだね」

「はい」

再びの沈黙

ああ

俺のバカ。

なんでだよ。せつかく愛理から振ってくれたのになんでまともな返しができないんだあ!。

自分で自分を戒めていると

俺はふと思いついた。

あつ

期末テストがあんじゃん!この話題を振って出来るだけ話そう!

「あつ　あのだ」

「はい?」

「もうちよつとで期末あるじゃん。愛理は準備とかしてるの?」

「えっ?　あつ　はい　少づつですがしています」

「そうかあ　凄いなあ!俺も見習って勉強しなきゃな」　俺は愛理

の言葉を聞いて見た目は平常を保ってるようにみせたが内心わ

「うわぁ まじやべえ 愛理はもう準備してんのに。
と、俺はそんな事を考えていると

「ねえ、大丈夫？ 顔赤いよ？」 「えっ！？だ 大丈夫だよ。こんな可愛い愛理と帰ってるから緊張しているだけだよ」 ボンツという音が聞こえそうな位に顔を赤くした愛理が隣にいた。

「冗談はやめてよ」
彼女の声はどこか震えていた。嬉しいのか、はたまた冗談に聞こえて悲しいのかは別。

だが これだけは言っとこう先ほど俺が言った言葉は俺の本心だ。
「冗談なんてめっそもない 今のは僕の本心だよ」確かに彼女からしてみれば自分に対して魅力は感じないんだろぅが俺ら端から見たら中学生にしては魅力が有りすぎるほどに美しい女性だ。

「そっいえば」
「ん？」

彼女は話を反らそうとして違う話題を振ってきた。

「尚人はテスト勉強しているの？」 「ぼっ、僕わ」
してるの？と聞かれるとしてる訳もなく・・・。「ぼっ、僕わ」
してるの？と聞かれるとしてる訳もなく・・・。「ちよっとずつね」
俺は少し誤魔化して言った。

「嘘をつかないで！」
なんと彼女には嘘がばれていた。

「仕方ないなあ
じゃあ私がテスト勉強を教えてください」

「えっ！？ 本当？」
「はい！！」

「でも悪いよ 愛理だって自分のテスト勉強があるだろ」
俺は自分のせいで彼女の成績が落ちるのが心配だった。

まあ

彼女は勉強もしっかり受けているし 小テストや確認テスト等でも満点やそれに近い点数を取っているから問題はないがそれでも俺は心配でならなかった。「いいのか？」

「何がですか？」

「だって愛理には勉強教えたら愛理が分からなくならないか？」

「大丈夫です！教えるのだってうちの復習になりますし」

「そっ、そうか じゃあ頼むわ」

俺は愛理が大丈夫と言うなら頼むことにした。

「わかりました！！そしたら急だけど今日からやりましょう」

「えっ？」

「期末テストまで時間がありませんから 今日からやらないと間に合いません」

実際、愛理の言う通りだ本当に時間がない。

「わっ、わかった。じゃあ家を教えるから来てもらえるか？」

「わかりました、では後で行きますね」

俺は彼女と勉強会を取り付けた。

そこで

ちよつど別れ道だったので別れることにした。

俺は自宅に帰って準備をするため早足になって帰り道を進んだ。

彼らの日々(帰り道にて)(後書き)

次で尚人の母親を出したいと思います(笑)

彼らの日々（勉強会 尚人の家にて）

「ただいまあ」

「あつ、お帰り」

俺が自宅のドアを開けると母がリビングから出てきて出迎えた。「今日友達と勉強するからあまり部屋に入らないでくれよな！」

俺は少し強い口調で母に言った。

「友達つて言ったってまた健太郎君でしょ？ そんなに強く言わなくても大丈夫よ」

母はそう言うが俺はまだ母に伝えていなかった。そう

俺が彼女 笹原愛理と付き合っていることお。

その内感づかれて知られるだろうと思うから今はまだ明かしてなかったがまさかこんなに早く知られる日が来るとわ。

俺は少しため息をついた。

「どうしたの？ ため息なんてついて」

「いや、なんでも。」

とにかく部屋に近づくなよ」

「はいはい。わかりましたよ」俺はもう一度言って部屋に向かった。

ボタン

俺は部屋へ入って扉を閉めた。

「それじゃあ準備するかあ」

俺は勉強会の準備をしながらあることに気がついた。

「ちよつと汚いかな。愛理は体が悪いから少し掃除するか」

俺は愛理が来るまでの時間、部屋の掃除を進めた。

「ふう、これくらいで良いかな」

部屋の掃除が終わった直後タイミングよく家のチャイムがなった。

「はい」と母が出迎えにでる音が聞こえた。

「キヤー」と母が叫ぶ声が聞こえた。

俺は母が叫けんだのを聞いて少し早めに下へ降りた。

「ちよつと早くきなさい」「なんだ・・・よ・・・もつ」

「もう、お母様が来なさいと言ったら早く来ないと駄目ですよ？」

俺は愕然と立ち尽くしていて彼女の言葉に返答が出来なかった。

ごくごく当たり前だが、彼女は私服を着ていて玄関に立っていた。

よろしくお願いします、お母様」

彼女はスツと綺麗なお辞儀をして母に挨拶をした。

「あっ、尚人の母の高山恵子たかやまけいこと申します。よろしくお願いします」

母もなんだかおぼつかない感じで挨拶をした。

つて、言うか

まず反応すべきは愛理が言った俺と愛理の関係だろ！

なんで母さんは何にも反応しないんだよ！

「まあ、愛理

玄関で立ち話もなんだ

部屋に行こうぜ」

俺は少しでも母の下から早く立ち去りたくて。

愛理に問いかけた。「そうね、じゃあ行きましょう」

愛理は玄関で靴を脱ぎ綺麗に並べて家へ上がった。

そして

俺は階段を上がり部屋へ招いた。

ギィィと彼女が俺の部屋のドアを開けた。

「へえ、尚人の部屋ってこんな風になつてゐるんだあ、意外に綺麗にしてるんだあ！」

彼女は俺の部屋はもう少し汚いと思つていたらしく少々ビックリしていた。

まあ

普段は彼女が思つた通りなのだがそこは言わないでおこう。「そこから辺に座つてて今テーブル持つて来るから」

俺はそう言つて部屋を出た。

「えつと確かこの辺に あつた！ よいしょつと」俺はテ

ーブルを持ち上げ物置からだした。

「それにしてもこれ埃被^{ほこり}つてんな」

埃を被つてゐるテーブルを体が弱い愛理の前に出すのは気が引けたので下から雑巾を持つて来ることにした。

ダツダダダ

「母さん雑巾ある？」

台所にいた母に尋ねた。「雑巾？はい、これ使つて」

母は少し湿気た雑巾を渡してきた。

「ありがと！」

俺はそう言つと二階へ戻りテーブルを拭いて下へ雑巾を返しに行き、また二階へ戻りテーブルを持つて部屋へ向かった。

「ごめん。待たせたね」

俺は彼女に一回謝罪をいれて中へは言った。

「もう遅いですよ、せつかく教えに来てあげたのに」
言葉は刺々しいが彼女は少し笑っていた。

「ごめんごめん

それより勉強始めよう?」俺は無理やり話をかえた。

「そうですね、始めましょう!」彼女は少し楽しそうに始めた。

「では、最初は何からしますか?」彼女は多分俺に合わせてくれるのだろう。一番最初にする科目を聞いてきた。「そうだなあ。数学かなあ?」俺は一番苦手な科目の数学をあげた。

「そうですか、わかりました。じゃあ適当にやってください」

「へっ!?!」

俺は彼女が余りにもなげやりなのでビックリして高い声を上げてしまった。「えっ、教えてくれるんじゃないの?」

「教えるよ、私はブラ〜としてるからわからないところがあつたら教えてくださいね」

彼女はそう言つて俺のベッドの上で横になった。「え〜と、これはこの公式を当てはめて、え〜とこれは・・・こうか! 愛理これであつてるか?」

俺は愛理に答えを聞いた。

「ちよつと見せて下さい」愛理はそう言つてノートを取つた。

「う〜ん、ここここは合つてるけど、ここは少し違つかなあ

ここはこつちの公式を当てはめると出来ます」

「お〜!すげえ、ありがとう!愛理!」

俺がそう言つた瞬間に

ボンッと音になるくらいに顔が赤く赤面した。

「あ、ありがとう何てそんな感謝される事は」

「そんな謙遜けんそんすんなつて」

「でも」

「それに相手に感謝するのは普通だろ!?!」

「そう、ですね」

彼女は顔を赤くしながら言った。

「やり方はわかったからまた暇してて」

「わ、わかりました」

俺はそう言ったら彼女は快諾してまたベットに座った。

俺は愛理に教えられながらも着々と勉強を進めた。

どれくらい時間がたっただろう。

外をみたら外はもう夕日がうつすら顔を出していた。

「なあ、愛理そろそろ かえん・・・ない・・・と」

時間も時間だし俺は愛理に帰ったらと問いかけようとしたら

そこにはスウー、スウーと寝息をたてながら俺のベットの上で寝て

いる愛理がそこにいた。「寝た・・・のか」

俺は眠っている愛理を起こさないように小声で呟いた。

それにしても。

可愛い顔して寝がやる。ああ、惚れ直した。

俺はそんな事を考えながら愛理の寝顔を見ていた。

それから一時間程たった。

もう外は暗くなり始めている。

「そろそろ起こすか」

俺はゆっくりと立ち上がり 愛理の肩を触り優しく揺らした。

「おおーい 起きる愛理ー」「んっんんん!」

愛理は軽く目を開けて背伸びをした。

「あつ、おはよございまゝす」

寝ぼけてるのか・・・。

俺がそう思った矢先。

「おやすみなさ〜い」

愛理はまたベッドに横たわった。

「おい！！寝るな。もう六時半だ！そろそろ帰らないとお前の親も心配するぞ！」俺は少し声を張り上げて言った。

「ええー。まだ寝たいですう」

「駄目、外も暗いし早く帰らなきゃ！」

「嫌です！まだここに居ます！」

愛理は頑固に俺の家に居ると言い出した。

「いい加減にしろ！」

俺は愛理を怒鳴り付けた。少々強く言い過ぎたがこれくらい言わなきゃ愛理も聞かないだろ。

「うう、わかりました」

彼女は涙を浮かべながら小動物みたいな声で承諾した。

「じゃあ、帰る準備をしなさい。それと家までは送っていくから」

俺はこれだけ暗いと愛理を危険に晒してしまうし、愛理の家を一度見てみたかった。

「わかりました」

愛理は渋々承諾し帰る準備を済ました。

二人で下へ降り、俺は母に愛理を送ってくると告げて家を後にした。

彼らの日々（勉強会 尚人の家にて）（後書き）

すみません遅くなりました。

誤字や脱字があるかもしれませんがお願いします」

彼らの日々（期末テスト後とプレゼント）

俺は愛理のおかげで期末テストを全ての教科で赤点をとることはなかった。

これは奇跡だ俺一人だけじゃ絶対なしえなかった事だ。愛理に感謝してもしきれない。

「そうだ何かお礼するか」今日は愛理が役員の仕事があるため俺は一人で下校している。

「何が欲しいかなあ？」俺は愛理が何か欲しいか考えながら歩いた。

俺はふと思った。

「そうだ！商店街にでてみるか！」

俺は下校道を変え商店街へむかった。

「そうだなあ？何が良いかな？」

俺は商店街へ着いても未だに考えていた。

俺ぐらいの高校生の予算など、たかが知れている。

俺はそれほど高くないかつ愛理がとても喜んでくれるものを探し歩いていた。

空が暗くなり街灯がぼちぼちと付き始めてきた時。

ふと見ると、アクセサリー店を見つけた。

「ここに入ってみるか」

俺は行き当たりばったりで歩いていたが入ったのはこの店が初めてだ。

「うわあ！沢山あるなあ！」

俺は入るなり驚きを隠せなかった。俺はファッションつてのに興味はなく、女子のどこるか男子が好むものは何も知らない。

だが俺は愛理の姿を想像し、どれを付ければより可愛くより綺麗に

なるか考えながら選んでいた。「これはどうだろうか？」

俺が手にしたのは先がハート型になっているネックレスを選んだ。

「これなら愛理にも似合うだろ！」値段を見ても少し高いが予算内だ。俺は即決した。

レジで会計を済ませ店の外へ出た、外はもう月が出ており時計を見るともう7時半を過ぎていた。「ヤバイな！少し時間を使いすぎたか」

俺は少し走りながら家へ帰った。

彼らの日々(初デートのとりつけ)

俺は昨日買った愛理へのプレゼントを机の引き出しにしまい学校へ向かった。

夏休みまで後2日教室や学校全体まで夏色ムード一色になっていた。俺もこの流れに乗りたいが不安があり乗り切れずにいた。>夏休みくその言葉には少し苦い思い出があった。

昔まだ尚人がまだ小学生の時。夏休み中のある日に事故にあっているのだ。今は昔みたいな過ちを侵すことは無いに等しいがその事がトラウマになりこの時期になると必ず不安に狩られるのだ。

しかも今は愛理という彼女がいる。この炎天下の中で彼女を守れるのかも不安の1つ。

このような事を考えてるだけでも胃が痛くなるのに夏休み中の宿題もどっさりと出てくる。

今年の夏は忙しくなりそうだ。

先生の話が終わり授業に移り変わっても俺の不安は途切れなかった。

- - - - -

全ての授業が終わり放課後になった。俺は愛理と一緒に帰ろうと誘おうとして彼女を探しているのだが見つからない。

「どこにいるんだろう？」学校を探し回っていると腐れ縁の健太郎にあった。

「健太郎〜！」

「んっ？ああ尚人がどうした？」

「それが愛理が見つからないんだよ…。」

どこにいるかわかるか？」俺は少し焦りをみせはじめていた。

「ああ。笹原か」

「なんか知ってるのか！」 「いやあ。知ってるもなにも今日笹原休みだろ」

「……え？」

俺の体に虚脱感が襲ってきた。

「お前またあの事を考えていたのか？」

「えっ……いや その」

俺は言葉に詰まった。健太郎が言うあの事と言うのは先程話した事故の話だ。

「はあ……」

健太郎はため息をついた。

「その調子だとなんで笹原が休んだかわからなさそうだな」

「ぐっ！」

健太郎は俺の事を何でもお見通しだった。

「いいか？ 良く聞けよ。笹原は今日体の定期検診と祖母の命日が重なったため学校を休んだんだ！」

健太郎はそう言った。まさに俺を敵視するように。「まあそうゆうなって」俺は彼をなだめるように言った。

「まあ良いが徐々に一緒に帰るか」

健太郎が提案してきた。「OK！ 帰るか！」

俺は健太郎と学校出て家への帰路へついた。

……健太郎と別れ家に着いた俺はリビングへ行きお茶を飲み自分の部屋へ向かおうとしたが後ろから声がした。

「あら、帰ってたの」

母だった。

「今な」

俺は素っ気ない態度で言った。

「そう、母さん今から買い物いつてくるから留守番よろしく」

「ああ」

母は返事を聞くとリビングを出て家を出た。

俺はうるさい母が出掛けた後に部屋へ行きベッドに横たわった。

「ああ。暇だなあ」

俺は家に居ても特にやることはなくいつも通りに部屋でゴロゴロしてようと思っていたが 愛理を探していた時の疲れがどっと出てきて俺はいつしか眠りについた。

「~~~~」

「んっんんん！」

俺は携帯の受信したら鳴るメロディーで目を覚ました。

一体どれくらいの時間がたっただろう。

そう思っただけの時計を見ると時間は6時を回っていた。

「ずいぶん寝だな」

今日は五時間授業だったので帰ってきたのが3時前なので裕に三時間は眠っていた。

そう考えながら携帯を開くとそこには愛理からのメールだった。

「うわぁ！」

俺は飛び起きた。愛理からのメールはきたことがなくいつも俺からメールをしていた。それが日常のだった。

俺は寝起きな体を叩き起こし携帯の画面を見た。「急にごめんな

さい。夏休みに入った次の週って空いてますか？」

彼女のメールは堅苦しく画面越しでも緊張感が伝わってくる。

俺はこうかえした。

「大丈夫、大丈夫。」

夏休みに入った次の週ね？空いてるよ！どうかした？」と俺は返した。

-. -. -. -.

俺が返してから10分後やっと返ってきた。

「はい！」

えーと

その週の水曜日にお出かけしませんか？」

と返ってきた俺は「わかったよ」と返信してメールを終わらせた。

その数分後俺はその喜びが込み上げてきた。

「これは、俗にようデートと言つものじゃないのか！うおお！よっしやあー！」

俺がはしゃいでるど。

「うるさい！起きてるならご飯食べて片付かないから！」

と母からの一喝

「はい」

俺は素直に返事をしてしたえ降りていった。

こうしては俺は愛理とのデートの約束を取り付けた！

彼らの日々(デート前日 夜)

デート前日の夜尚人は眠れずにいた。

「明日何処に行こう?」

夜の11時を過ぎ街は闇に覆われていた。

尚人はベッドの中で考えていた。

「ああ。どうしよう楽しみすぎて寝れない!」

尚人は明日のデートは初めてのデートで、しかも相手が尚人が大好きな愛理だからだ。

「まあ。いい

今日は寝よう」

尚人は布団のなかで丸くなり眠りについた。

- - -

なんてこともなく

「ぶはあ」と声を上げて尚人は起き上がった。

「寝れないな。水飲んでこよ」

尚人はベッドから出て下へ降り、キッチンへ行き水を飲んで、部屋へ戻った。

尚人が部屋へ戻り時計を確認した。

時間は1時半になっていた。

「もういい!こうなったら最終手段だ」

尚人はバックから音楽プレイヤーを取りだし曲をかけながらベッドに潜り込んだ。

そしてやっと尚人は眠りにつけた。

時計は午前3時40分指していた。

彼らの日々(デート) (前書き)

() この中には心情を書きたいと思います。

彼らの日々(デート)

「遂に来てしまったか」

尚人はベッドの上でため息をついていた。

決して嫌だった訳じゃない。不安だったのだ。

大好きな愛理とのデートを考えるだけで思考回路がパニックを起す。

なのでストレス発散程度にため息をついている。

時間は8時20分

俺は部屋でデートに行くときの服を着て下へ降りた。

着替えが終わりキッチンにあるテーブルの椅子に座った。

時間は8時50分だった。

「はい、ご飯」

母の恵子が朝ごはんを出してまたキッチンに戻った。俺が朝飯を食べていると。

「そんなおしゃれしてどこか出掛けるの？」

恵子が聞いてきた。

「あつ？うん。ちょっとね」俺は簡単に言っつて箸を進めた。

「ごちそうさま」

俺は食器をキッチンに置き二階へあがった。

時間は9時25分。

部屋に戻り、携帯・財布等々を準備した。

「そろそろ行くか」

俺は玄関へ行き靴を履いて 「いってきます」

俺は一言いい、家を出た。

- - - - -

待ち合わせ場所に着いた。時間は9時45分。

「少し早かったかな？」

そう思いながら待つてると前の方から周りを気にしながら歩いてく
るのが見えた。

「愛理！」

「あつ！尚人！ おはようございます」

「おはよう」

毎回思う本当愛理は可愛い。

今の俺の中では

愛理＝女神

的な感じになっている。美しい本当に美しい。なぜ周りの人々が振
り向かないのかが不思議なくらいだ。

とか思っている場合ではなく、まず謝罪を

「ごめん」

「????なにがです？」

愛理は俺が謝ったことにビックリしていた。

「いや、普通デートって男がルートだとかを決めるだろ？」

だけど俺、無計画で来てしまったんだよね。

本当ごめん！」

俺は愛理に陳謝した。

だが愛理は

「ええ、大丈夫です。お互いに初めてだったら仕方ありませんよ」

と一言、優しい言葉をかけてくれた。

「ありがとう」

「いいえ、では行きましょう！」

愛理は俺の手を引っ張って走り出した。

- - - - -

走り出して10分後人通りの多い通りに出た。

「そんなに走って大丈夫か？愛理」

俺は愛理の体の事もあり楽しさを押し殺して聞いた。

すると彼女はムスツ！とした顔で。

「尚人は私を甘く見すぎです！この通り私は元気ですよ！」

愛理はその場で俺にジャンプして見せた。

「わかったよ、でも調子がすぐれなくなったら早めに言えよ」

（せっかくの尚人とのデートですし言いたくないな）「んっ？なに
かいったか？」

「いえ！何にも！」

わかりました！なにかあったら直ぐ言います」

愛理は素直に快諾してくれた。

まあ

その前に言った言葉も気になるが

気にしない方向で。

「じゃあまず あっちに行ってみるか！」

「尚人」

「ん？どうした？」

愛理はモジモジしながら 「あの！せっかくのデートですし手を繋
ぎませんか？」

愛理は顔を赤く染めて言ってくれた。もちろんここは。

「ああ、良いよ」

そう言いながら愛理の方へ手を差し出した。

愛理は少し戸惑ったが

ゆっくり、そして確実に俺の手を握った。

愛理の手は少し冷たくそして柔らかかった。

俺達は手を繋ぎながら行く宛も決めずに歩き始めた。

彼らの日々(デート2) (前書き)

進行が遅くてすみません

彼らの日々(デート2)

時刻は11時を少し過ぎていた。行く宛も決めずに歩いていると少し大きめのデパートを見つけた。

「わあ！大きいデパート！」

愛理は興奮俺に抱き着くように体を密着してきた。「おっ、おい愛理！」

「んっ？」

「その、いけない物が腕に当たっ……なっなんでもない！」「????？」

愛理は不思議そうにこちらを見ていた。こいつはどこか抜けている。

「まあ良い、入ってみるか？」

「えっ？」

「お前入ったこと無さそうだったからさ嫌ならいいんだ」

「いや、いやじゃないよ!?でも良いの?他に行きたい所は無いの?」

「俺は別に無いよ、と言うより俺は愛理が行きたい所ならどこでも良いんだ」「え」と、じゃあお言葉に甘えて」

愛理はそう言っ下を向いた。

俺は少し鼻で笑ってデパートへ向かって歩き出した。

「あ！待ってよ尚人！」

愛理は後ろから走ってきて俺の腕に抱きつきそのまま歩き出した。

.....

「うわあ！ひろ〜い

あっ！あれなんだろ?尚人!あっち行こ!」

「お、おい愛理!あんまりはしゃぐな」

愛理ははしゃいでデパートの奥へ走って行く。

俺は愛理を追いかけて走るが見失ってしまった。「ったく、はし

やぎすぎだ本当……。じゃあね探るか」

俺は愛理の行きそうな所へ向かう事にした。

このデパートは西館、東館に分かれていて西館は主に食品や婦人服を売っていて東館は主に映画やゲームセンター等があり子供達が遊ぶには持ってこいだ。

「ゲーセンに行ってみるか」

愛理ははしゃいでいるし服はあまり見ないだろうと予測して俺はゲーセンに向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0695w/>

彼女の為に出来ること

2011年10月31日18時24分発行